光明寺通信

こうみょう

この如来は光明なり。光明は智慧なり。
智慧はひかりのかたちなり。
親鸞聖人著作『一念多念文意』

十一月十三日（日）に、例年の報恩講に兼ねて、光明寺第四世住職継承法要を厳修いたしました。

報恩講とは真宗門徒にとって一年の中でもっとも大切な御仏事で、本山（京都・東本願寺）では、宗祖親鸞聖人の御祥月命日である十一月二十八日まで、一週間にわたり勤められる法要です。

全国の末寺では、本山にならって宗祖親鸞聖人の御命日の近くに勤められますが、光明寺では、毎年十一月の第二日曜日にお勤めしています。

宗祖親鸞聖人の教えに遇い、私たちが生きてゆく「よりどころ」を顕かにされた御恩徳に報謝し、我が身を通して教えにうなずくことによって、共に念仏申す身となっていくことが願われています。

どなたでもご参詣いただけますので、また来年、ご参詣くださいますようお願い申し上げます。

真宗本廟・御影堂門（京都・東本願寺）

第２号
2017 年 1 月 20 日発行

発行責任者
〒135-0013
東京都江東区千田９－７
真宗大谷派　光明寺
住職　小林尚樹
電話：03-3644-3043
メールアドレス：
koumyouji@sky.plala.or.jp

【巻頭のことば】について②

この如来は光明なり。光明は智慧なり。
智慧はひかりのかたちなり。
『一念多念文意』

私が、本山の東京教務所に勤めていたころ、初老の男性から、以下のような相談の電話を受けたことがあります。

「数年前に定年退職をしたが、その退職金で息子との二世帯住宅を建てました。一緒に暮らしたいと言ってくれたから、二世帯住宅にしたのに、結婚後、息子夫婦は全く顔を見せない。そして、息子夫婦ともゴタゴタしている中で、妻が突然、家を出て行ってしまった。長い間一生懸命に働いてきて、幸せな老後を夢見てきたのに、なぜ自分がこのような目に合わなければならないのでしょうか。自分の親は熱心な浄土真宗の門徒で、自分も親にならい、定年後は朝夕の「正信偈」のお勤めは欠かしたことがない。それなのに、自分には、なぜ光が当たらないのでしょうか」と。

どうやら、その方は、「正信偈」をお勤めしているのだから、自分にはご利益があるだろうと思っておられるようでした。そして、光に照らされるということを、人生が良い方へ向いてゆく、そして自分にとって良いことが起こるように思っておられるようでした。

残念ながら、「正信偈」をお勤めすることで、その様なご利益はないのですね。病気が治ることもなければ、人生が劇的に良い方に向いてくることも約束はできません。

「正信偈」は、親鸞聖人が出遇った教えが記されています。ですから、「正信偈」をお勤めするということは、教えを聞くことにほかなりません。教えを聞くことによって、自分自身の姿を知らせていただくのですね。その、自分自身の姿を知るということが、光に照らされるということになるのですね。

親鸞聖人は、光とは、はたらきであるとおっしゃいます。照らし、知らせるはたらきです。どのように照らすのかと言いますと、それは、教えによって、照らすのだと言われるのですね。

真っ暗な宇宙に星が見えるのは、宇宙に漂う物体に光が当たっているからですね。光そのものは目には見えませんが、照らされたものの上に、光はそのはたらきを現します。

光に照らされた私は、まことの教えによって、ありのままの私を知ることになります。それは、辛いことかもしれませんが、真実に生きる第一歩なのだと思っています。

「正信偈」って お経じゃないんですか？

光明寺をお預かりするようになり、ご法事では皆さんと一緒に「正信偈」をお勤めしております。また、お盆やお彼岸のお参り、月参りでも、お勤めの本をお配りして、ご一緒にお勤めいただいています。

多くの方は、一緒にお経をあげていると思われているかもしれませんが、「正信偈」はお経ではないのですね。

お経は、仏陀であるお釈迦様が説かれた教えを文字にして遺されてきたものですが、「正信偈」は親鸞聖人が書かれた主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』の「行巻」の末尾にある「偈（うた・詩）」なのです。

「正信偈」には、親鸞聖人の仏教のご了解、信仰のエッセンスが詰まっているので、本願寺第八世の蓮如上人が「正信偈」を取り出して、朝に夕に、親鸞聖人からの教えを声に出して読み、浄土真宗という仏教の歩みを一人ひとりの人生に確かめていかれたのです。

そのことが、真宗門徒の生活に欠かすことのできない朝夕のお勤めとして、今にまで伝わってきているのです。

特集

報恩講兼光明寺第4世住職継承法要　厳修

2016年11月13日（日）

毎年の報恩講に合わせて、光明寺第四世住職継承法要を勤めました。例年は四十人前後の御参詣だったのですが、この度は、ご案内を広げて、盆・彼岸にお参りに伺っているお宅や市川の墓地にご縁のあるご門徒さんにもご案内をしたところ、お手伝いの方を含めて七十名ほどの御参詣がありました。

小さな本堂ですが、もともとは先の戦争の前に説教所として開かれたお寺ですので、そのスタイルを残しつつ、参詣席の方を広くしておりますので、窮屈だったとは思いますが、何とかお座りいただきました。ありがとうございました。

法要では、私と長男、それに三名の僧侶方に御出仕いただき、厳かに勤め上げることができました。

お斎は、今年初めて一人ずつのお弁当にしてみました。坊守と前坊守を中心に女性陣のご協力により、大変好評でした！　名物の、柿の入った白和えも、美味しかったです。

真宗寺院は、報恩講に始まり報恩講に終わると言われています。さあ、来年の報恩講に向けて、歩みはじめます！

報恩講兼住職継承法要　式次第

先　総礼（合掌・称名念仏）
次　伽陀　稽首天人
次　表白
次　伽陀　直入彌陀
次　正信偈　真四句目下
次　念仏讃　淘五
次　和讃　弥陀大悲の誓願を　次第六首
次　五遍返
次　回向　願似此功徳
次　御俗姓御文
次　総礼（合掌・称名念仏）
次　法話　住職　小林尚樹

以上

儀式の次第は、難しい文字が並んでいますが、法要の記録として、記しました。

表白

敬って、大慈大悲の阿弥陀如来の御尊前に申し上げます。

本日ここに、光明寺第四世住職並びに坊守を継承するに当たり、ご門徒と有縁の法中方のご臨席のもと、宗祖親鸞聖人の御前にて、住職継承の決意を申し述べます。

不肖小林尚樹、真宗大谷派光明寺を預かる家に生を享け、今日までご門徒、師友のお育てをたまわりました浅からぬ宿縁を憶い、その厚きご恩を謝する念尽きぬものがあります。

顧みますに、光明寺は、一九三〇年（昭和五）に説教所として、現在の千田二十一番地に創立されましたが、戦災によって焼失し、一九四七年（昭和二十二）に現在地に建立されました。

思うに、阿弥陀如来は、すべての人を分けへだてなく、必ず救う本願の名号を成就して、釈迦如来がこの世に生まれたるは、その教えを説かんがためと、生涯をもって人々にお勧めになりました。

その尊きみ教えは、長き歴史と道のり、そして龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空（法然）という七人の高僧方を経て、宗祖親鸞聖人に受け継がれ、よって私たちに浄土真宗が顕かにされました。

浄土真宗は、浄土をまことの宗とする教えであります。浄土は阿弥陀如来の本願によって荘厳された世界です。何を中心に生きてゆけばよいのか分からない私たちに、仏の教えを通して、阿弥陀如来の本願を宗として生きることを顕かにしてくださったのです。宗祖親鸞聖人に人生を学び、念仏申す生活を私たち一人ひとりが選び取ることを願いとして、これからも寺を開き続けてまいります。

今ここに、第三世住職、釋専生より法灯を譲り受けた釋尚樹、その流れをくむとはいえども、はなはだ浅学非才にして、その力は十分ではありませんが、ご門徒や有縁の方々のご助力を得て、み法の灯を絶やさぬように、ひたすら努め、念仏申す生活を、ご門徒の皆さま方と共に歩み続けることを誓います。

二〇一六年十一月十三日

光明寺第四世住職　釋尚樹

謹んで申し上げます。

住職としての決意表明を「表白（ひょうびゃく）」として読み上げました

仏事について・・・ここが知りたい！

～亡くなった方を
霊魂としてお祀りするのでなく、
仏さまとしてお参りしましょう～

仏教では、亡くなった方は仏さまであると受け止めます。

仏さまというと、阿弥陀如来やお釈迦さまを思い浮かべますね。阿弥陀如来は、私たちを救ってくださるご本尊です。お釈迦さまは、人間でありながら悟りをひらいた仏陀です。大切な仏さまは、私たち真宗門徒にとってはこの二尊です。

その二尊に加えて、親鸞聖人は「諸仏（しょぶつ）」と言われます。この私に、仏教のご縁をくださる仏さますべてを諸仏と言われるのです。

例えば、親鸞聖人にとっては大切な師匠である法然上人、または、日本に仏教を伝えてくださったと言われる聖徳太子、あるいは、親鸞聖人の著作に引用される浄土教の先輩たち、これらの方々は、親鸞聖人にとっては、大切な仏さま、諸仏なのですね。

ですから私たちにとっては、亡くなっていかれた大切な方々は、この私を仏教にご縁を繋ぐ大切な仏さまなのです。

しかし、日本の仏教の作法と言いますか、しきたりになっていることの多くは、亡くなった方を霊魂にしていることが多いのです。

例えば、葬儀で清め塩を使いますが、亡くなった方は仏さまですので、塩で清めなければならないような穢（けが）れはありません。出棺の際に棺の蓋を閉めるのに釘で打ち付けることはしません。そんなことまでして閉じ込めなければならないものはないからです。

葬儀で行われていることの多くは、亡くなった方が霊魂になっていて、私たちに災いが降りかからないようにあの手この手で避けようとしているのです。繰り返しますが、亡くなった方は仏さまですので、私たちに災いをもたらすことはありません。

また、すでに浄土の仏さまですので、迷ってもいません。私たちが追善供養することで成仏する、などということはありません。

お盆に、ご先祖をお迎えしたりお見送りをしたりすることもありません。それも霊魂の信仰なのです・・・。

なんだか、あれもやらない、これもやらないと、浄土真宗は亡くなった方に対して冷たいなあ、と思われるかもしれませんが、本当に亡き方を敬うとはどういうことなのかを思ってみると、浄土真宗ほどご先祖を大切にする仏事作法はないように思うのです。

仏事作法には意味があります。少しずつ、お伝えして参りたいと思います。

お勤めの本は
大切に扱いましょう！

ご門徒の皆さまには、ご一緒に「正信偈（しょうしんげ）」をお勤めしていただくために、お勤めの本をお渡ししています。

お勤めの本には、お念仏や親鸞聖人の言葉など、仏教の大切な教えが記されていますので、床や畳の上に直接置かずに、紙一枚、ハンカチや包み布の上、または台の上に置くようにしてください。

お勤めをするという行為は、ご先祖を供養するためではありません。亡くなった方（仏さま）をご縁として、今を生きる私たちが教えをいただくということですので、お勤めの本を大切に扱うことは、教えを大切にいただくことに繋がります。

お心がけいただきたいと思います。

二〇一七年　年忌法要（亡くなった年）

四十九日法要…亡くなった日から四十九日
一周忌法要…二〇一六年（平成二十八年）
三回忌法要…二〇一五年（平成二十七年）
七回忌法要…二〇一一年（平成二十三年）
十三回忌法要…二〇〇五年（平成十七年）
十七回忌法要…二〇〇一年（平成十三年）
（二十三回忌法要）…一九九五年（平成七年）
二十五回忌法要…一九九三年（平成五年）
（二十七回忌法要）…一九九一年（平成三年）
三十三回忌法要…一九八五年（昭和六十年）
五十回忌法要…一九六八年（昭和四十三年）

年中行事のご案内

⊙**永代経**…毎年、五月の第二日曜日。
今年は、五月十四日になります。
亡くなった方々をご縁として、今を生きる私たちが仏の教えに出遇う法要です。
どなたでもご参詣いただけます。
お寺へご連絡ください。

⊙**報恩講**…毎年、十一月の第二日曜日。
今年は、十一月十二日になります。
親鸞聖人の御命日は十一月二十八日と伝えられています。親鸞聖人からいただいたご恩に報いる生活を、お一人お一人が確かめるための法要です。
どなたでもご参詣いただけます。
お寺へご連絡ください。

⊙**修正会**…毎年、元日の十一時より。
一年の歩みを、ご一緒に「正信偈」をお勤めすることから始めましょう。
お勤めの後は、お雑煮やお汁粉をご一緒にいただきます。
どなたでもご参詣いただけます。
お寺へご連絡ください。

ホームページより、ある日の「住職の日記」

大河ドラマ「真田丸」を全て観ました。

僕は以前より（二十年ほど前から）、「戦国武将の中でだれが好きか」と聞かれれば、即座に「真田幸村」と答えていました。

理由はいくつかありますし、物語の作者によって、少しずつその生涯や態度も違うので、なぜ好きなのかということは絞り込めません。

強いて言えば、ブレていないというところでしょうか。戦国の世にあって、他の武将は、生きるために態度や信条を変えざるを得ないこともあったでしょうが、幸村はそこがブレていないように思うんですよねえ。

あの時代、生きてゆこうと思えば、家康に付くしかなかったのに、最後まで家康には付かない・・・とか。

ドラマでは、大坂の陣での幸村の戦いぶりを見ていた上杉景勝（俳優：遠藤憲一）に「日の本一の強者（つわもの）よ」と言わせます。また、景勝は、自分ができなかった「義に生きる」姿を幸村に見ています。

まあ、面白いんですよね。「真田十勇士」だって、実在したと思いたくなります。

（中略）

ちなみに、幕末は？と聞かれたら、薩摩の桐野利秋。三国志は、趙雲子龍です。

そして、「ワンピース」は当然、ルフィです。